第2講 2018年度 試行調査 第4問 (古文)

第4問

次の文章は『源氏物語』「手習(てならい)」巻の一節である。浮舟(うきふね)という女君は、薫(かおる)という男君の思い人だったが、匂宮(におうのみや)という男君から強引に言い寄られて深い関係になった。浮舟は苦悩の末に入水(じゅすい)しようとしたが果たせず、僧侶たちによって助けられ、比叡(ひえい)山(ざん)のふもとの小野(おの)の地で暮らしている。本文は、浮舟が出家を考えつつ、過去を回想している場面から始まる。これを読んで、後の問い(**問1〜5**)に答えよ。(配点 50)

あさましうもてそこなひたる身を思ひもてゆけば、宮を(注1)、すこしもあはれと思ひ聞こえけむ心ぞいとけしからぬ、ただ、この人の御ゆかりにさすらへぬるぞと思へば、小島(こじま)(注2)の色を例(ためし)に契り給(たま)ひしを、などてをかしと思ひ聞こえけむとこよなく飽きにたる心地す。はじめより、薄きながら(注3)ものどやかにものし給ひし人は、この折(をり)かの折など、思ひ出(い)づるぞこよなかりける。かくてこそありけれと聞きつけられ奉らむ恥づかしさは、人よりまさりぬべし。さすがに、この世には、ありし御さまを、よそながらだに、いつかは見むずるとうち思ふ、なほわろの心や、かくだに思はじ、など A心ひとつをか

メモ欄

へさふ。

からうして鶏(とり)の鳴くを聞きて、いとうれし。母の御声を聞きたらむは、ましていかならむと思ひ明かして、心地もいとあし。供(注4)にてわたるべき人もとみに来ねば、なほ臥(ふ)し給へるに、いびき(注5)の人はいとどく起きて、粥(かゆ)などむつかしきことどもをもてはやして、「御前(おまへ)に、とく(ア)聞こし召せ」など寄り来て言へど、まかなひもいと心づきなく、うたて見知らぬ心地して、「なやましくなむ」と、ことなしび給ふを、強(し)ひて言ふもいと(イ)こちなし。下衆(げす)下衆しき法師ばらなどあまた来て、「僧都(そうづ)(注6)、今日下(お)りさせ給ふべし」、「などにはかには」と問ふなれば、「一品(いっぽん)の宮の御物(もの)の怪(け)になやませ給ひける、山の座(ざ)主(す)御修法(ずほふ)仕(つか)まつらせ給へど、なほ僧都参り給はでは験(しるし)なしとて、昨日二たびなむ召し侍(はべ)りし。右大臣殿の四位少将、昨夜(よべ)夜更(ふ)けてなむ登りおはしまして、后(きさい)の宮の御文など侍りければ下りさせ給ふなり」など、いとはなやかに言ひなす。恥づかしうとも、あひて、尼になし給ひてよと言はむ、(ウ)さかしら人すくなくてよき折にこそと思へば、起きて、「心地のいとあしうのみ侍るを、僧都の下りさせ給へらむに、忌(い)(注7)むこと受け侍

メモ欄

らむとなむ思ひ侍るを、さやうに聞こえ給へ」と語らひ給へば、ほけほけしううなづく。例(注8)の方におはして、髪は尼君(注9)のみ梳(けづ)り給ふを、別人(ことひと)に手触れさせむもうたておぼゆるに、手づから、はた、えせぬことなれば、ただすこしとき下(くだ)して、B親にいま一たびかうながらのさまを見えずなりなむこそ、人やりならずいと悲しけれ。いたうわづらひしけにや、髪もすこし落ち細りにたる心地すれど、何ばかりもおとろへず、いと多くて、六尺(注10)ばかりなる末などぞうつくしかりける。筋なども、いとこまかにうつくしげなり。「かかれとてしも」と独りごちゐ給へり。

（注）
1　宮 ―― 匂宮。
2　小島の色を例に契り給ひし ―― 匂宮に連れ出されて宇治川(うじがわ)のほとりの小屋で二人きりで過ごしたこと。
3　薄きながらものどやかにものし給ひし人 ―― 薫のこと。
4　供にてわたるべき人 ―― 浮舟の世話をしている女童(めのわらわ)。
5　いびきの人 ―― 浮舟が身を寄せている小野の庵(いおり)に住む、年老いた尼。いびきがひどい。
6　僧都 ―― 浮舟を助けた比叡山の僧侶。「いびきの人」の子。
7　忌むこと受け侍らむ ―― 仏教の戒律を授けてもらいたいということ。
8　例の方 ―― 浮舟がふだん過ごしている部屋。
9　尼君 ―― 僧都の妹。
10　六尺 ―― 約一八〇センチメートル。

メモ欄

問１　傍線部Ａ「心ひとつをかへさふ」とあるが、ここでの浮舟の心情の説明として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。
解答番号は［１］。

① 匂宮に対して薄情だった自分を責めるとともに、現在の境遇も匂宮との縁があってこそだと感慨にふけっている。
② 匂宮と二人で過ごしたときのことを回想して、不思議なほどに匂宮への愛情を覚え満ち足りた気分になっている。
③ 薫は普段は淡々とした人柄であるものの、時には匂宮以上に情熱的に愛情を注いでくれたことを忘れかねている。
④ 小野でこのように生活していると薫に知られたときの気持ちは、誰にもまして恥ずかしいだろうと想像している。
⑤ 薫の姿を遠くから見ることすら諦めようとする自分を否定し、薫との再会を期待して気持ちを奮い立たせている。

問２　傍線部(ア)〜(ウ)の解釈として最も適当なものを、次の各群の①〜⑤のうちから、それぞれ一つずつ選べ。解答番号は 2 〜 4 。

(ア)　聞こし召せ　2

① お起きなさい
② 着替えなさい
③ お食べなさい
④ 手伝いなさい
⑤ お聞きなさい

(イ)　こちなし　3

① 気が利かない
② 大げさである
③ 優しくない
④ 気詰まりだ
⑤ つまらない

(ウ)　さかしら人　4

① 知ったかぶりをする人
② 口出しする人
③ 身分の高い人
④ あつかましい人
⑤ 意地の悪い人

問３　この文章の登場人物についての説明として**適当でないもの**を、次の①〜⑤のうちから一つ選べ。解答番号は［　5　］。

① 浮舟は、朝になっても気分が悪く臥せっており、「いびきの人」たちの給仕で食事をする気にもなれなかった。

② 「下衆下衆しき法師ばら」は、「僧都」が高貴な人々からの信頼が厚い僧侶であることを、誇らしげに言い立てていた。

③ 「僧都」は、「一品の宮」のための祈禱（きとう）を延暦寺の座主に任せて、浮舟の出家のために急遽（きゅうきょ）下山することになった。

④ 「右大臣殿の四位少将」は、「僧都」を比叡山から呼び戻すために、「后の宮」の手紙を携えて「僧都」のもとを訪れた。

⑤ 「いびきの人」は、浮舟から「僧都」を呼んでほしいと言われても、ぼんやりした顔でただうなずくだけだった。

問４ 傍線部Ｂ「親にいま一たびかうながらのさまを見えずなりなむこそ、人やりならずいと悲しけれ」の説明として最も適当なものを、次の①〜⑤のうちから一つ選べ。解答番号は 6 。

① 「かうながらのさま」とは、すっかり容貌の衰えた今の浮舟の姿のことである。

② 「見えずなりなむ」は、「見られないように姿を隠したい」という意味である。

③ 「こそ」による係り結びは、実の親ではなく、他人である尼君の世話を受けざるを得ない浮舟の苦境を強調している。

④ 「人やりならず」には、他人を責める浮舟の気持ちが込められている。

⑤ 「『……悲しけれ』と思ひ給ふ」ではなく「悲しけれ」と結ぶ表現には、浮舟の心情を読者に強く訴えかける効果がある。

問5　次に掲げるのは、二重傍線部「かかれとてしも」に関して、生徒と教師が交わした授業中の会話である。会話中にあらわれる遍昭（へんじょう）の和歌や、それを踏まえる二重傍線部「かかれとてしも」の解釈として、会話の後に六人の生徒から出された発言①〜⑥のうち、適当なものを二つ選べ。ただし、解答の順序は問わない。解答番号は［7］・［8］。

生徒　先生、この「かかれとてしも」という部分なんですけど、現代語に訳しただけでは意味が分からないんです。どう考えたらいいですか。

教師　それは、

　たらちねはかかれとてしもむばたまの我（わ）が黒髪をなでずやありけむ

という遍昭の歌に基づく表現だから、この歌を知らないと分かりにくかっただろうね。古文には「引き歌」といって、有名な和歌の一部を引用して、人物の心情を豊かに表現する技法があるんだよ。

生徒　そんな技法があるなんて知りませんでした。和歌についての知識が必要なんですね。

教師　遍昭の歌が詠まれた経緯については、『遍昭集』という歌集が詳しいよ。歌の右側には、

　なにくれといひありきしほどに、仕（つか）まつりし深草（ふかくさ）の帝（みかど）隠れおはしましまして、かはらむ世を見むも、堪（た）へがたくかなし。蔵人の頭の中将などいひて、夜昼馴（な）れ仕まつりて、「名残りなからむ世に交（ま）じらはじ」とて、にはかに、家の人にも知らせで、比叡（ひえ）に上りて、頭下（かしら）ろし侍りて、思ひ侍りしも、さすがに、親などのことは、心にやかかり侍りけむ。

と、歌が詠まれた状況が書かれているよ。

生徒　そこまで分かると、浮舟とのつながりも見えてくる気がします。

教師　それでは、板書しておくから、歌が詠まれた状況も踏まえて、遍昭の和歌と『源氏物語』の浮舟、それぞれについてみんなで意見を出し合ってごらん。

① 生徒A ── 遍昭は、お仕えしていた帝の死をきっかけに出家したんだね。そのときに「たらちね」、つまりお母さんのことを思って「母はこのように私が出家することを願って私の髪をなでたに違いない」と詠んだんだから、遍昭の親は以前から息子に出家してほしいと思っていたんだね。

② 生徒B ── そうかなあ。この和歌は「母は私がこのように出家することを願って私の髪をなでたはずがない」という意味だと思うな。出家をして帝への忠義は果たしたけれど、育ててくれた親に申し訳ないという気持ちもあって、だから『遍昭集』で「さすがに」と言っているんだよ。

③ 生徒C ── 私はAさんの意見がいいと思う。浮舟も出家することで、遍昭と同じくお母さんの意向に沿った生き方をしようとしているんだよ。つまり、今まで親の期待に背いてきた浮舟が、これからの人生をやり直そうとしている決意を、心の中でお母さんに誓っていることになるね。

④ 生徒D ── 私も和歌の解釈はAさんのでいいと思うけど、『源氏物語』に関してはCさんとは意見が違う。薫か匂宮と結ばれて幸せになりたいというのが、浮舟の本心だったはずだよ。自分も遍昭のように晴れ晴れした気分で出家できたらどんなにいいかという望みが、浮舟の独り言から読み取れるよ。

⑤ 生徒E ── いや、和歌の解釈はBさんのほうが正しいと思うよ。浮舟も元々は気がすすまなかった、親もそれを望んでいない、それでも過去を清算するためには出家以外に道はないとわりきった浮舟の潔さが、遍昭の歌を口ずさんでいるところに表れているんだよ。

⑥ 生徒F ── 私もBさんの解釈のほうがいいと思う。でも、遍昭が出家を遂げた後に詠んだ歌を、浮舟は出家の前に思い起こしているという違いは大きいよ。出家に踏み切るだけの心の整理を、浮舟はまだできていないということが、引き歌によって表現されているんだよ。

■ 2018年度 試行調査

問題番号（配点）	設　問	解答番号	正　解	配　点
第４問（50）	1	1	4	7
	2	2	3	5
		3	1	5
		4	2	5
	3	5	3	7
	4	6	5	7
	5	7 － 8	2 － 6	14(各7)

（注）
－（ハイフン）でつながれた正解は，順序を問わない。

■現代語訳

（浮舟は）あきれたことに失敗した我が身を思い続けてゆくと、匂宮を、少しでも愛しいと思い申し上げたというような心がたいそう道理にはずれている、ただ、この人〔＝匂宮〕とのご縁でさまよい歩いたと思うと、匂宮に連れ出されて宇治川のほとりの小屋で二人きりで過ごしたことを、どうして魅力的であると思い申し上げたのだろうかとひどくいやになったという気持ちがする。はじめから、（愛情が）浅いながらも穏やかでいらっしゃった人〔＝薫〕は、このときはあのときはなどと、思い出すことは格別にすぐれていた。（私が）このように生きていたと（薫に）聞きつけられ申し上げるような恥ずかしさは、（他の）人よりもきっと勝るだろう。そうはいってもやはり、この世では、（薫の）昔のままのお姿を、遠くからでさえ、いつ見るだろうかと思うが、やはり悪い心だなあ、このようなことだけでも思わないようにしよう、などと心ひとつで思い直している。

ようやく鶏が鳴くのを（浮舟は）聞いて、とてもうれしい。母上のお声を聞いたならば、ましてどうだろう〔＝どれほどうれしいだろう〕と思いながら夜を明かして、気分もとても悪い。供として来るはずの人〔＝浮舟の世話をしている女童〕もすぐには来ないので、そのまま横になっていらっしゃると、いびきの人〔＝浮舟が身を寄せている小野の庵に住む年老いた尼〕はとても早く起きて、粥などの煩わしいことなどを大切に扱って、「あなたにおかれても、はやくお食べなさい」などと寄ってきて言うけれど、（浮舟は）給仕もたいそう気にくわなく、嫌で見知っていない気持ちがして、「気分が悪くて」と、それとなく断りなさるのを、強いて（食べるように）言うのもたいそう気が利かない。いかにも身分が低そうな法師たちなどがたくさん来て、「僧都は、今日（比叡山から）下りなさるはずだ」（と言うので）、「どうして急に」と問う様子なので、（法師たちは）「一品の宮が御物の怪に患っていらっしゃったが、山の座主が御修法を勤め申し上げなさるけれど、やはり僧都が参上なさらないのでは効果がないと言って、昨日再度お召しがありました。右大臣殿の四位少将が、昨晩に夜が更けてから（僧都がいる山に）登っていらっしゃって、后の宮のお手紙などがありましたので（僧都は山を）下りなさるのだ」などと、たいそう盛んに言い立てる。（浮舟は）恥ずかしくとも、（僧都に）会って、尼になさってくださいと言おう、口出しする人が少なくてよい機会だと思うので、起きて、「気分がただもうたいそう悪くございますので、僧都が（山を）下りなさったようなときに、戒律を授けてもらいたいと思いますので、そのように申し上げなさ

いませ」と相談なさると、（老尼は）ぼんやりとうなずく。

（浮舟は）ふだん過ごしている部屋にいらっしゃって、髪は（いつもは）尼君〔＝僧都の妹〕だけが櫛でときなさるのを、他の人に手を触れさせるようなことも嫌に思われるので、自分の手で（やろうとしても）、それでもやはり、できないことであるので、ただ少しとき下ろして、親にもう一度（出家前の）このままの（髪が長い）姿を見せないままにきっとなるだろうことが、自分の意志ですることだがとても悲しい。たいそう思い煩いをしたからであろうか、髪も少し抜け落ちて細くなった気がするけれど、どれほども衰えず、（髪の量は）とても多くて、六尺くらいある髪のすそなどが美しかった。毛筋なども、とても細かく美しい様子である。「このようであれと思って」と独り言を言って座っていらっしゃった。